



文教協会50年を振り返る④

20周年 [昭和59年]

文教協会事務局

昭和59年は、文教協会設立20周年、また翌年に予定されていた戸田公入城350周年の記念事業と呼応して、大垣市としても大きな事業が行われました。

これは、日本で最初の博士号を授与された大人物が4名も生まれ、明治・大正時代は「博士の町」とか「鉄道の町」といわれるほど、日本の近代化に歴史的役割を担った人材を多く輩出した大垣市は、その土台となった大垣藩の文教尊重精神に非常に大きな功績があることに由来します。こうして文教協会では、10周年ごとに記念事業を開催しています。その精神は、10周年記念事業、会報特集号の中の序文に現れていますので、紹介します。

『大垣を象徴するのに‘水の都’とともに‘文教都市’ということばがいい古さ、今もなお市民各層の間にその名残を留めています。学制頒布以来百年、戦後三十年、時の流れとともに、この尊い教育尊重の気風が忘れられようとする時、先輩が築かれた遺徳を偲び、その伝統の継承を確かめる機会にいたしたいものです。この趣旨にそい、文教都市大垣の近代的再現を目指して発足したのが、大垣市文教協会です。』

こうして文教協会では、20周年でも、この教育尊重の気風が忘れられないように、先輩が築いた遺訓を偲び、その伝承を確かめる機会を設ける事業として三つの柱を立てました。

文教協会の自主事業として「①大垣市の中心とした文教史の編纂」、「②大垣城の立体模型の作製」を行いました。「③歴代戸田藩校と庶民文化の顕彰」については、大垣市、文化会館の事業ながら、文教協会も積極的に協力しました。

20周年によせて

大垣市文教協会会長 土屋 斉

文教協会が設立されてから20年がたちました。戦後の社会の変遷は、我が国の歴史が始まって以来のはげしいものであります。その流れの中で、大垣に伝統ある文教の主張を再認識し、時代に即した教育の道を見いだすために発足したのが、文教協会であります。

小中学校の先生たちを中心にして、市民全体が教育に目を向け、教育の町として大垣を発展させていこうというのがこの運動であります。そして着実に地道に20年の歴史を重ねてきたことは喜びにたえないところであります。

かつて、大垣が文教都市としての地位を誇り得たのは、先人たちが、教育者あるいは思想家としての確固たる意識と信念を持って、地域社会全体に教育尊重の気風を育て上げた結果だと思えます。

われわれは、この伝統を受けついで、教育の理想像を求めつつ、市民全体の結束によって、時代に即応する人間形成に努めたいと思います。大垣市の繁栄と市民文化向上の担い手を育てる責任を有していることを忘れてはなりません。

発足以来、会員の手によって多くの研究や実践あるいは提案がなされ、文教都市としての基盤を確立してきましたが、20周年にあたり、今後いっそうの成果と発展を期待するものであります。

(昭和59年 20周年記念特集号)

文教協会設立20周年記念式典 並びに講演会

とき 昭和59年11月12日(月)午後1時
ところ 大垣市文化会館

○第1部 城郭模型完成記念序幕式

○第2部 文教協会設立20周年記念式典

*感謝楯贈呈

- ①文教協会設立と育成に尽力された功績者
- ②「文教のまち大垣」の編集に尽力された功績者
- ③大垣城郭模型製作に尽力された功績者

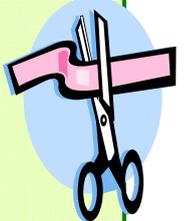
○第3部 記念事業紹介並びに講演会

①記念事業紹介

- ・「文教のまち大垣」の編集を終えて
- ・「大垣城郭模型」を製作して
- ・「大垣の先賢展」への協力について

②講演

「文教のまち大垣の歴史」について



時代を振り返る

昭和59年の日本のキーワード

- ◇ケリコ森永事件
- ◇エリマキトカゲ・コアラ・ラッコフォーム
- ◇長野県西部地震(玉滝村土砂崩れ)
- ◇新札発行(現在の紙幣)

昭和59年の大垣市のキーワード

- ◇飯沼欲齋生誕200年 記念顕彰会開催
- ◇樽見鉄道開業

大垣城～城郭模型製作～

文教協会設立20周年記念に、大垣城の城郭模型が製作されました。当時の「製作記録」や「大垣城の学習のしおり」、文教協会から発刊された「戸田のとのさま」などから、諸先生方の大垣城にかける熱い思いを感じてみたいと思います。

大垣城の学習のしおりより



明治時代初めの大垣城

大垣城は巨鹿城、または、麋城と呼ばれ、大きな鹿にたとえられた大変美しい城でした。大垣城の始まりは、今から500年ほど前のことです。この城の歴史には、

- ・ 豊臣秀吉が天守閣を造らせていること
- ・ 関ヶ原合戦のとき、初めて石田光成が入城して西軍の本拠にしたこと
- ・ 島原の乱のときに出陣していること
- ・ ペリーが来航したとき兵を送っていること

などがあります。これは、大垣が日本の歴史の流れの中で大きな位置を占めていたことを物語っています。

大垣は城のもとに栄えた町です。この大垣からは、優れた人がたくさん世に出て「文教のまち」、「博士のまち」として、全国的に有名でした。

「戸田のとのさま」より 戸田公入城350年記念出版

戸田の殿様による大垣藩政—歴代殿様のおもな事績—

慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いのあと30余年間に大垣の殿様は、石川・松平・岡部・松平と四氏の交代がありました。その後は、官営2年(1635年)尼崎から大垣へ入部した戸田の殿様が藩政をとりました。戸田氏は11代、明治維新の廃藩置県まで、235年の永木にわたり継承されました。

初代の殿様氏鉄は、尼崎5万石の城主から倍増の10万石に栄進して大垣城主となりました。このことから幕府が氏鉄にかけた期待がいかに大きかったかが察せられます。

わたしたちのふるさと西美濃は、日本のほぼ中央にあつて、政治的・経済的・軍事的にも大きな役割を果たしてきました。また、四季の変化と豊富な地下水に恵まれ、暮らしやすい土地柄でありました。しかし、揖斐川流域に位置し、昔からたび重なる水害にみまわれ、それとのたたかいが続いてきました。

氏鉄は、尼崎城主であったとき、河川の改修やじめじめした低い土地の排水に大きな功績がありました。そのため、氏鉄は「地方巧者」とよばれ、治水事業の専門家として高く評価されました。こうしたことから幕府は、氏鉄の人物や手腕を見込んで大垣へ移ることを命じたとも言われています。氏鉄は幕府の期待にたがわず、治山・治水、それに新田開発と力を注ぎ民生の安定につくしました。

一方、氏鉄は膳所(滋賀県)在城時代から、一流の儒学者について学問を学んでいましたので、大垣の殿様になってからも学問の奨励に力を入れました。氏鉄は「四角文章」を著し、殿様として民を治めようとするれば、学問を興すことが大切であると説きました。また、氏鉄が家訓として著した「八道州」には、殿様としての正しい政事のあり方などが説かれています。氏鉄以後の殿様もこの教えをよく守りました。たとえば三代目の氏西は、当時流行した鷹狩りを、田畑を荒らし農民を苦しめるからと嫌い、そのかわりに鹿や猪狩りを奨励したということです。このように氏鉄が治世の根本方針とした治水と学問奨励は、代々の殿様が受け継ぎました。このことが今日の大垣の繁栄をもたらし、大垣を「産業のまち」とか「文教のまち」とよばせるようになったのです。

ごあいさつ 大垣市文教協会 会長 土屋 斉

大垣城は、戸田氏が11代、230余年にわたり、平和を維持して文化と経済を発展させてきた10万石の居城であります。

明治維新となり廃藩置県がしかれ、新しい時代の夜明けを迎えました明治時代、城郭は解体されて次第に姿を変え、門構え、御殿櫓、塀、石垣、濠などすべて跡形もありません。ただ一つの天守閣も国宝建造物に指定されていましたが、昭和20年7月戦災のため焼失し、今は鉄筋コンクリート造りになり、その外観だけはむかしの面影を偲ばせているにすぎません。

このため市民の皆様には往時の大垣城の全容を知っていただき、その大きさを現市街地と対比して見直してもらおうと、文教協会設立20周年記念事業の一つとして「大垣城郭の復元模型製作」をとりあげたのであります。…



大垣市郷土館蔵